

Blitzen Times

Vol. 104

June.2026

Race Report

2026.5.24~31 ツアー・オブ・ジャパン

2026.5.23 MTB Coupe du Japon やわたはま国際レース XCC

2026.5.24 MTB Coupe du Japon やわたはま国際レース XCO

ツアー・オブ・ジャパン 8日間の総力戦

国内最大級のステージレース、UCIアジアツアー2・2「ツアー・オブ・ジャパン」。堺から東京まで8日間にわたる戦いで、Astemo 宇都宮ブリツツェンは各地で積極的にレースを動かし続けた。ステージ優勝には届かなかったものの、攻めの姿勢とチーム力は随所で光り、後半戦へとつながる確かな手応えを掴んだ。



STAGE 1
堺ステージ



STAGE 2
京都ステージ



5月、大阪・堺を皮切りに開幕したツアー・オブ・ジャパン。平坦から山岳まで多彩な8ステージで争われるこの大会に、Astemo 宇都宮ブリツツェンは総合上位とステージ優勝を狙い挑んだ。

各ステージで主導権争いに加わりながら、エースを勝負どころへ送り込むチーム戦略を徹底。長丁場のレースの中で、その総合力が試される戦いとなった。

STAGE1 堺ステージ

開幕戦は堺市内の完全平坦コース。高速レースが予想される中、各チームともスプリントを見据えた展開となる。

序盤から逃げが形成されるものの、大きなタイム差は許されず、集団はコントロールされたまま終盤へ。ブリツツェンも位置取りを重視しながら集団前方をキープし、リスクを抑えつつ次のステージへと備えた。

STAGE2 京都ステージ

京都ステージはアップダウンを含むテクニカルな周回コース。逃げが決まりやすいレイアウトの中、序盤からアタック合戦が続く。

ブリツツェンも積極的に動いて前方に選手を送り込み、レースの主導権を握る展開を構築。終盤はペースアップによって集団が絞られ、小集団スプリントで総合勢も大きなタイム差なくフィニッシュした。



STAGE 3
いなべステージ



STAGE 4
Astemo 大鹿
チームタイムトライアル



STAGE3 いなべステージ

三重県いなべ市で行われる第3ステージは、細かなアップダウンが続く消耗戦。

中盤に形成された逃げに対し、メイン集団はタイム差をコントロールしながら追走し、ブリツツエンも集団内から追走し、ブリツツエンも集団内で脚を温存しつつ終盤勝負に備えた。終盤のペースアップで逃げは吸収され、アタックと吸収が繰り返されるタフな展開の中、安定して前方を維持する走りで次のステージへとつないだ。総合系エース谷は上りゴールの先頭集団にしっかりと残り、タイム差ゼロの17位フィニッシュで総合11位以内を視野に入れた。

STAGE4

Astemo 大鹿

チームタイムトライアル

Astemo社が冠スポンサーを務める大鹿村の特設コースで行われた、ツアー・オブ・ジャパン初のチームタイムトライアル。

アップダウンとテクニカルなレイアウトの中、Astemo宇都宮ブリツツエンは綿密に組んだローテーションで走り切り、6人全員が役割を果たしてアジア人のみのチームとして最上位となる4位に食い込んだ。レース中盤には暫定トップタイムでホットシートに座り、チーム一丸で準備してきた成果をタイムに結びつける内容で、総合争いの土台をさらに固めるステージとなった。



STAGE 5
信州飯田
ステージ



STAGE 6
富士山
ステージ



STAGES 信州飯田ステージ

南信州の自然を舞台にした第5ステージは、周回コースと登坂を組み合わせたレイアウト。

この日も序盤から逃げが形成され、ブリツェンは状況を見極めながら集団内でコントロールに加わった。終盤の上りでペースが一気に上がり、集団は分裂するものの、総合を意識した走りで致命的なタイムロスを避け、後半戦へと望みをつなぐ一日となった。タフなアップダウンの中で谷が日本人最高位のステージ15位と健闘し、個人総合でも9位へとジャンプアップして、まずはチーム目標だった「総合10位以内」を確保した。

STAGE6 富士山ステージ

大会屈指のクイーンステージ、富士山ヒルクライム。純粋な登坂力が問われる一本勝負だ。

序盤からハイペースで進んで集団は早い段階で崩壊し、それぞれが自分のリズムで登る個人戦の様相となる。ブリツェン勢も粘り強く登坂し、大きなタイム差が付く中で総合を守る走りを見せ、最終盤へ向けた位置取りを確保した。総合上位が激しく入れ替わる中で谷は日本人最上位を死守し、チームとしてもUCIポイント死守とさらなる加算をにらみつつ、残る相模原・東京の2ステージでの巻き返しに望みを託す展開となった。



STAGE 7
相模原
ステージ



STAGE 8
東京ステージ

STAGE7 相模原ステージ

終盤戦に入る相模原ステージは、アップダウンとスピードが融合する難コース。

逃げを巡る攻防が続く中、ブリツェンは前線で積極的にレースへ関与し、レースを動かし続ける姿勢を崩さなかった。終盤には再三のアタックで集団が不安定になるものの、重要なライバルから目を離さない走りで、最終ステージへ向けた総合順位を守り切った。

STAGE8 東京ステージ

最終日は東京の市街地を舞台にした高速クリテリウム。

序盤からスピードの高い展開となり、逃げと吸収が繰り返される中で各チームが最後のチャンスを狙う。ブリツェンは集団前方での位置取りを徹底し、スプリント勝負へ対応しながら8日間の戦いを締めくくった。エース岡のスプリントに勝負を託し、6人全員が完走でフィニッシュしたことで、過酷なステージレースをチーム一丸で走り抜けた証を東京のゴールに刻んだ。

8日間を通じて、ブリツェンはどのステージでも前でレースを作る姿勢を貫き、攻め続けるスタイルを貫いた。結果以上に、長丁場で培われたチームワークと経験は、全日本選手権、そして後半戦へと続く大きな原動力となる。

やわたしはま国際MTB 2連戦 悔しさと収穫の週末

愛媛県八幡浜市民スポーツパークを舞台に開催された「やわたしはま国際MTBレース2026」。ショートトラック形式のXCCと、フルコースで争われるXCOの2連戦にAstemo宇都宮ブリッツェンの沢田時が挑んだ。国内外の強豪が顔を揃えたハイレベルなレースの中で、初日はアクシデントからの5位、2日目は意地の走りで3位表彰台を獲得。

勝利には届かなかったものの、コンディションと課題、そしてシーズン後半へ向けた手応えがくつきりと浮かび上がる週末となった。

やわたしはま国際は、沢田にとって特別な大会だ。

初めて全日本タイトルを獲得した思い出の場所であり、「非常に好きて、得意意識のあるコース」と語るフィールドに、今年も戻ってきた。タイトなコーナーとパンプ状の地形、短い登りとハイスピードセクションが連続するレイアウトは、テクニクとパワーの両方が求められる。「アジア選手権のよう」と表現したくなるほど国内外の有力選手が集まり、シーズン序盤の重要レースとなった。

XCC

痛恨の出遅れと冷静なりかバリー

初日の夕方に行われたXCCは、約1・2キロのショートコースを周回するハイスピードレース。スタート直後の位置取りが勝敗を左右する中、沢田

は「周りをしっかり見ながら優勝を狙う」と冷静さと攻撃性を胸にグリッドに並んだ。

しかし、レースは1周目で大きく動く。

ペダルを踏み外す痛恨のミスで出遅れ、スタート直後から集団後方に沈んでしまったのだ。北林力（UNNO FACTORY RACING）や副島達海（TRKWORKS）らが先頭を引く一方、沢田は8番手前後からの追い上げを強いられることになる。それでも焦らず、2周目にはじわじわとポジションを上げて先頭バックに復帰。

北林、副島、セルギエンコ・テニス（カザフスタン）らとともに5人の先頭集団を形成し、中盤には後方からピンズ・ヤニック（スイス）も加わるなど、常に高い強度が続く展開となった。ただし、スタートでの口

スと追い上げのダメージは大きく、沢田は「攻撃するより耐える」時間が長く続いた。最後は北林が抜け出して優勝、2位ヤニック、3位副島という結果の中で、沢田は5位でフィニッシュ。

「スタートのミスと、体が動かない中での我慢のレースだった」と振り返りつつも、「こういう時に翌日のXCOで調子が向上くこともある」と前向きに気持ちを切り替え、2日目に備えた。



XCO

攻め続けた末の3位表彰台

2日目のXCOは、約4キロのコースを7周するタフなロングレース。XCCよりもテクニカルセクションと登坂区間が増え、「自分向きのレイアウト」と感じていた沢田にとって、巻き返しのチャンスとなる舞台だった。

レースは14時にスタート。序盤から北林、副島、沢田の3人が抜け出し、先頭バックを形成する。

沢田も何度かペースアップを仕掛け、主導権争いに積極的に加わる形でテンポの良い先頭交代が続いた。レースの分岐点となったのは、4周目の最も厳しい上り区間。ここで北林が一段ギアを上げると、沢田はその変化に対応できず、中盤でじわじわと遅れてしまう。その周回の終了時には、北林が単独トップ、副島が2番手、沢田はトップから約1分遅れの3番手という構図に変わった。

さらに後方からは竹内遼（MERIDA BIKING TEAM）が追いつてくるが、沢田は「抜かれないこと」「崩れないこと」を最優先に、淡々と自分のペースを刻む。



終盤の周回でも大きくラップタイムを落とすことなく、安定した単独走を続けた結果、3位でフィニッシュ

して表彰台を確保。北林が優勝、副島が2位と、国内勢のレベルの高さを実感させられる中での3位は、「悔しさと同時に、自分の立ち位置が見えたレース」となった。

見えた課題と、次への布石

2日間を通して、沢田は「得意なコースで勝てなかった悔しさ」を何度も口にした。一方で、マウンテンバイクとロードを両立させながらシーズンを戦う難しさ、コンディショニングの波をどう抑えるかといった課題も、はつきりと浮かび上がった。

それでも、XCCでの出遅れから先頭バックまで戻したりカバリー力XCOで攻め続けながら最後は3位にまとめきった安定感は、大きな収穫と言える。

「次は必ず表彰台の一番上に立てるように」と語るその言葉どおり、やわたはまでの2連戦は、沢田とAstemo 宇都宮ブリッツェンにとって、シーズン後半のターゲットレースへ向けた重要な通過点となった。



OUTLET Sale

過去アイテム、旧ロゴアイテムが、
オンラインショップ限定の
アウトレットアイテム多数!
この機会にお得にゲット!



<https://blitzen.theshop.jp/>

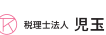
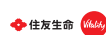
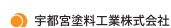
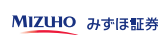
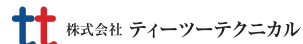


私たちはAstemo宇都宮ブリッツェンを応援しています。

Astemo



この街を走る幸せを、ともに
Honda Cars 栃木中央



Thank you for your support.

Blitzen 7